

## 英作文における冠詞、前置詞、代名詞

岡 田 六 男

文法の講義みたいな題目で恐縮だが、本文は、長年、英文らしいものを書くことを仕事としてきた筆者が、いかに本題の3つの品詞の用法に悩んできたか、そして今もなお悩み続けているかを若い学生諸子のご参考に供するものに過ぎない。

すでにご案内かと思うが、研究社発行の数ある辞典の中に英和活用大辞典 (Kenkyusha's New Dictionary of English Collocations) というのがある。編者は故人となられた勝俣銓吉郎先生であるが、この辞典は日本人にとって、英作文に関する最高権威 (the final court of appeal in matters concerning English composition) とでもいうべきものだ。この勝俣先生が、「冠詞と前置詞と代名詞が自由に駆使できるようにならなければ、英作文が1人前になったとはいえない」と、よくいわれたものだ。でも英語を書こうとする者が体験していることだが、実際、吾々日本人には、修得しがたい代物である。現代の英語は他のヨーロッパ語と違って、性別が殆んどといってよい程その姿を消してしまった上に、動詞の変化も、さほど、複雑でないで、入り易いようだが、だんだん奥へ入ると、冠詞だの、前置詞だの、関係代名詞だのといったもののために極めて修めがたい language だということが分る。

先づ順序として、冠詞から始めよう、定冠詞、不定冠詞の用法、又はその省略など、英作文を学ぶ者にとっては、常に頭痛の種だ、(a headache to us students of English composition) オートメーション、電子計算機の今日でも、まだ、ボタンつ押せば、即座に答が出てくるというわけにい

かないので、前置詞、代名詞、その他の場合も同様、「習うより慣れよ」(Practice makes perfect) のことわざ通り、常に、英文を精読する習慣をつけて学ぶことだ。そうすれば、perfect とまで行かなくても near-perfection の域に達することも不可能でない筈だ。

余り文法を意識し過ぎて、文法をやかましくいう人のことを、英語で a stickler for grammar (この前置詞に注意!) というが、英作文でも好ましくない存在だ。初歩の文法書を1通り読んでおくことは必要だが、Onions や Curme や Jespersen 等の英文法は、英語の読み書きが相当自由に出来るようになってから読んではじめて興味も湧き、その有用なことがわかるものだ、それまでは、やさしい本に出てくる英文の pattern をものにするのが何より大切である。前記の Collocation 辞典の外、英作文に非常に役立つと思われるのは、開拓社の The Advanced Learner's Dictionary of Current English という英々辞典だ。この字引は戦前、(1948年頃) 別名で出版されたものの、第2版で、最初ロンドンで出版され、1963年に日本で翻刻されたものだ。筆者などは、POD 即ち、Pocket Oxford Dictionary のお世話になったものだが、現代の学生には、前記開拓社の辞典の方が、American English の単語も相当数、入れてあり、例文も沢山あって使い易い。冠詞については、この辞典では、普通名詞(不定冠詞を用いたり、複数形を用いたりする名詞)には、[C] の符号、冠詞の不必要な場合には、[U] の符号が、それぞれつけてあり、大抵の場合、用例を示している。いう迄もなく、[C] は countable, [U] は uncountable を意味する。初学者は、advice (忠告), equipment (機械、設備), furniture (家具), information (情報), progress (進歩), scenery (景色) 等の名詞を用いる時よく、不定詞をつけたり、複数形にしたりして先生に注意されるものだが、この辞典は、このような間違をさけさせるため、一々用例を示しているから便利だ。

さて、冠詞の用法について、初学者でも *The dog is a faithful animal.* も *A dog is a faithful animal.* も *Dogs are faithful animals.* と同じく一類を代表させる表現だということはよく知っている。又「昔々、おじいさんとおばあさんがありました。おじいさんは山に柴かきに、おばあさんは川に……」といった文章を英訳する時、最初は不定冠詞を用いるが、すぐ次の文からは、代名詞を用いなければ、定冠詞を使うと、いうようなことも大抵心得ている。しかし少し混み入ってくると、*a* とすべきか、*the* とすべきか見当がつかなくなるものだ、ある程度は、論理的に考えれば、判断がつく場合もあるが、数学と違って、公式通りに行かないことが多い。結局、慣れが物をいうということになる。

よく、「第二次世界戦争」を英語で書くとき、*World War II* (*two* と発音する) に定冠詞をつける人がある。*The Second World War* ともいうのだから、*the* をつけていけない理屈はない筈だが、習慣上、*Richard II* などと同じように、定冠詞をつけないだけだ。又逆に、*I saw him on* (又は *in*) *the Ginza.* などのように、つけなくてよさそうな所に定冠詞がつく例もある。*London* の有名な *street* に *the Strand* というのがあるが、それになぞらえて *the Ginza* などといったのかも知れないが、オランダの都市 *The Hague* などと共に定冠詞をつけることになっている。ついでながらニューヨークの *Fifth Avenue* などは *the* をつけない。国名でも、*U.S.A.*, *Philippines*, *Netherlands* などは定冠詞をつけて用いることは、ご承知の通りだが、アフリカの *Congo* など、よく *The Congo* とか *the Belgian Congo* などと定冠詞をつけることがある。米国と英国の国会はそれぞれ *Congress* と *Parliament* と冠詞なしで用いるのが普通だがアメリカ人などには、余り冠詞を意識しない人が多いらしい。米国憲法 (*The Constitution of the United States of America*) の *Article 1, Section 10* には、*No State shall, without the Consent of the Congress,*

lay any Imports or Duties…… とあるかと思うと，すぐその次の paragraph では，No State shall, without the Consent of Congress…… と定冠詞がない。筆者がこれを指摘した米国人などは “That’s insignificant” と澄した顔をしていた。とにかくどこの text を見てもそうになっているから，最初のいきさつは，いざ知らず，少なくとも今では，misprint として片付けるわけにはいかない。ただ注意すべきことは，普通なら無冠詞で用いられる固有名詞又は固有名詞なみに扱われる名詞でも特定の 場合は The Japan of today is vastly different from the Japan of a hundred years ago. (勿論，こんなかたい表現にしなくても単に Japan today is vastly different from what she was a hundred years ago. といって差支えない) とか the Parliament of the 19th century などのように定冠詞をつけることがあることだ。同様に a Shakespeare とか a new Japan のような表現もありうる。更に，抽象名詞や物質名詞でも，時と場合により不定冠詞をとることがある。例えば，「すばやさ」 agility が，with agility (=agilely), with the agility of a tiger, with an agility (which is [or was]) suggestive of a tiger などと用いられる。冠詞の省略もまた中々会得し難い。次のような文では冠詞が往々省かれている。“He was fool enough (=foolish enough) to do so.” “He was elected President.” “He turned communist.” “This thesis—for thesis it certainly is—would make a deep impression on the reader.” “Of this society Mr. Goto is now president.” “Tennyson succeeded Wordsworth as poet laureate.” “He dug into documents in church, university and court.” “He is tired body and soul.”

同じ名詞でも抽象的に用いる場合と，普通名詞として用いられる場合とがあることは，すでにご存じの通りだが，それぞれの用法については，前記の辞典などをよく注意して見る必要がある，fact rather than fancy

とか、shift fact from fiction (ふるい分ける) のような表現や Fact is stranger than fiction (事実は小説より奇) という proverbial expression があるかと思うと、It's not a fact; it is a figment of the imagination (作者のつくりごと) のように 普通名詞として冠詞をつける場合も多い。パンの固い外皮を crust (パンの中味は crumb) というが "If you can't get crumb, you'd best eat crust." に見るように物質名詞として用いられると共に、The poor boy had to work to earn a (or his) crust (一片のパンを得るため); She got a crumb of comfort (=a little, a big, of) のように普通名詞として扱われる。こんな例は枚挙にいとまがない。

又前置詞と結び付いて冠詞を用いない phrase が無数にある。次に挙げるのは、極めてありふれた例である。above sea level; 10° below zero (零下10度); at close range (近くで見ると、近くで見た); a case in point (適例); at full speed; in full view (まともに見える所に); an ex-official on pension (年金をうけている元官吏); leave with pay (有給休暇); on (upon) request (請求次第); commodities in request (需用のある); dolls on display (陳列してある); a nation at war (文戦国); beyond repair (回復の見込みがないまで); under construction (建設中); from of old (昔から); from on high (天から); with intent to do so (そうする積り); from door to door; written in pen and ink; He stood, cap in hand (hawk on fist; baby in arms), 要するに、冠詞の用法は、一朝一夕に会得出来るものでないから、徐々にになれるより仕方がない。

日本の某外交官がロンドンの大使館に在勤中、毎日のように、タイピストにタイムズ紙の論説を冠詞抜きで打たせ、どの位まで復元できるかを試したという話をご本人から聞いたことがある。なんのことはない、戦前の白文に句語、訓点をつける漢文演習みたいなものだ。時々誰かに冠詞を抜

いた簡単な文を写して貰って，練習して見るのも1つの方法だ。不必要な所に冠詞を入れたり，*a* と *the* がごっちゃになったりするものだ。次の抜粋は，イギリスの有名な医学の権威が物した *The Human Body* という，かなり昔の本からだが，冠詞の用法は理屈だけでは駄目だということが分るだろう。

“The size of the brain depends to a certain extent on the bulk of the body, tall men on the average have large brains than small men, just as a Newfoundland dog has a bigger brain than a fox-terrier. The increase of brain which is directly due to increase in size of body gives no increase of brain power; hence tall and bulky men are not necessarily more able than small and short men. Thus, although we cannot argue that because a man has a big brain he in a man of great capacity, yet the fact remains that many of the world's most famous men had large heads and big brains. In the average Englishman the brain weighs 1,360 grammes (48 ounces); in Cromwell it is said to have been 2,231 grammes and in Byron 2,238 grammes. In Gambetta, the French statesman, it weighed only 1,294 grammes. Still, if size of brain is not a certain index of capacity, it must be taken into account; Broca found when he compared the brains of a group of eminent men with those of men of ordinary ability that the average eminent man had a brain eighty grammes above the ordinary.”

次は前置詞だが，日本の学生は何より *preposition* がむづかしいと口癖のようにいう。実際，なれるまでは容易でない。外人が日本語を習う時でも，所謂「てにをは」（彼等は，これを *particles* とか *postpositions* とか呼んでいる）に悩まされる。*ga* と *wa*, *de* と *ni* は理屈だけでは習得できないのである。同様にわれわれは *on*, *in*, *of*, *to*, *for*, *from*, *with* などの用法に始終苦しんでいる。*swim in the river*, *glide on the lake* 位までは何とか論理的にわかるが，“*I met him in the street.*” と英人がい

うところを、米国人は *on the street* というようだ。だから、どちらでも差支えないのだな、と、判断できるような場合が沢山ある。“It is *on the cards that*…… (=probable) という表現を覚えたら、あとになって、米語では往々 *in* を用いることがわかった、昔斉藤秀三郎先生の熟語本位の英和中辞典というのがよく用いられたものだが、その中の *world* の項に “He is in this world, but not of it” (俗人ばなれがしている) という例があったのを記憶している。Hardy の *Tess* の中にも (第47節) “What he looked he felt. He was in the agricultural world, but not of it.” というのがある。smart な表現である。

Lincoln の “government of the people, by the people, for the people” は余りにも有名だが、これもまた前置詞の smart な用法である。Webster 辞典の第2版の *wash* の項に *wash one's hands of* (日本語では足を洗うというが) という phrase がでているが、その説明が, *To disclaim or renounce interest in, responsibility for, or further connection with*…… となっている。これなども、前置詞の使い分けの適切な例といえよう。

前記の *Dictionary of Collocation* では、前置詞の用法を、各関係動詞、形容詞、名詞の P のところに示している。S の部で、*of* を伴う形容詞を拾って見ると、*sad of appearance; sanguine of success; scarce of provisions; short of stature; sick of life; slow of foot (understanding); sparing of one's praised; stout of build; strong of will; studious of one's business; suggestive of a monkey; susceptible of several interpretations; suspicious of his intentions, swift of foot* 等がある。A の部での *to* を伴う形容詞には、*adjacent (to the building); alive (to the necessity); allusive, adverse, analogous, antagonistic, application, antagonistic, applicable, approximate, attentive, attrac-*

tive, averse, awake 等がある。これに adamant to temptation (断固として誘惑に動かされない) He is allergic to food he has not yet tasted. (食わず嫌い) などをつけ加えて見るのもよからう。

英語の文法書の中で，名詞，形容詞，動詞，副詞別に前置詞の用法を集めたものに有名な Nesfield の Grammar Book IV というのがある。今では大抵の文法の本や辞典が，この種の用法を示している。筆者なども学生時代に Nesfield の independently of his father; simultaneously with the event; fortunately for Japan; previously to his arrival. 等の表現を暗記したものだ。

英作文で arrive at や arrive in の相違などは，よく注意されるものだが，次の at と in の用法などは一寸ややこしい。The signal is (set) at danger という表現があるが，これは信号，殊に旧式の場合内信号 (home signal) が停止 (stop) を示しているという意味で，進行 (clear 又は proceed) の信号現示でないことをいう。もし The signal is in danger とすると，信号機そのものが，危い状態にあるかのように聞えてまずい。もっとも，position という語を後につけ加えれば，at でも in でも差支えないわけだ。今日の go-stop signal なら，さしずめ，The signal is red. といえよ。進行なら The signal is green.

逆に日本語の「に」と「の」が preposition で訳せる場合を考えて見よう，「に」は at, in, on, by, to で表わす場合が多いが，「金に困る」(hard up for money), 「父に隠す」(conceal something from one's father) などのような場合もある。そうかと思うと，日本語では「に」を用いる動詞，例えば「手を触れる」，「会う」「近づく」のように英語では，他動詞で前置詞を用いない場合もある。「の」は，apostrophe や of のほか，「息子の貞夫」his son Sadao の如く同格を用いる場合，又は学校の運動場 (school ground) のように noun+noun の collocation に頼る



ことも往々あるが、色々の前置詞で片づける場合もまた非常に多い、「池のこい」(carp *in* the pond), 「網棚の荷物」(baggage *on* the rack) 「生花の本」(a book *on* flower arrangement), 「富士の雪」(snow *on* Mt. Fuji), 「東京の雪」(snow *in* Tokyo), 「谷崎の小説」(a novel by Tani-zaki), 「胃病の薬」(a medicine for a stomach trouble), 「10万円の小切手」(a cheque for ¥100,000), 「大理石の像」(a statue *in* marble=a marble statue), 「数学の権威」(an authority *on* mathematics), 「成功の鍵」(the key *to* success) 等はよく見受ける前置詞の用例である。

動詞が前置詞を伴って他動詞として扱われる場合、特に、受け身として用いられる時、例えば、He was *laughed at* in public; No conclusion has been *arrived at* yet; It cannot be *dispensed with*; The book referred to above is out of print; The general was *made away with*. 等々の場合、初学者はよく前置詞を落すことがあるから、注意せねばならない。又 cash in on (……を利用する); clamp down on (……を弾圧する) のような phrase もよく新聞や雑誌で見受ける、look up to (……を尊敬する) に対して look down on (……を見下げる、軽べつする) という idiom があるが、次のような場合、うっかりすると、とんでもない間違いをする。

“You look down on your luck, Betty.” “I am. I’ve just lost my job.” この場合の look は seem の意味で to be down on one’s luck は dejected, blue を意味する cliché ともいうべき古臭い phrase である。対話の意味は、いう迄もなく「ベティさん、あんた、憂うつさうね」「憂うつよ、失業しちゃったんですもの」というのであって前記の look down on の phrase とは何等の関係もないのである。

この外 prepositional phrase としてよく用いられるものに、in accordance with; at variance with; in partnership with; in the event of;

in opposition to; with a view to; with reference to 等々があるが，in between; from under; from between; from of old; from in front of; from behind 等前置詞を重ねて使うものもこの中に入れて考えればよい。

ここで一寸注意しておきたいのは，度々引合いに出す Collocation 辞典についてである。この大辞典は編者が殆んど半世期に亘って，書籍，雑誌から集めた実際英語の例を systematically に整理編集したものだが，用例が余りに多いため，初学者が選択に迷うことがある。一例を挙げよう。outskirts (郊外) の項に前置詞を伴う用例が，9つ程あり，at が2つ，in が1つ，残り6つが on となっている。ある学生は on the outskirts of…… の例が多いから1番普通だろうという判断がつかず，最初の at の例を応用して作文をつくったところ，先生が on に直したので，先生も辞典も頼りにならないと思ったという笑えない話を聞いたことがある。しかしこんな場合はいくつもあるわけではない。序ながら，Collocation 辞典の time に関する連語の用例は，6頁に亘っているが，そのうち前置詞を伴う用例だけでも，たっぷり1頁位ある。勿論 in time (間に合って) も on time (時刻通り，正確に) も出ているが，後者は American English で，英国では，The train is running to time の如く to が普通だという説明まで加えてある。同じ time でも「拍子」の意味の場合，別項(3)となっていて，keeping time to music 「音楽に拍子を合わせて」等の用例がでている。この項の prepositional phrase の例は out of time (拍子はずれて) だけ挙げてあるが，Conan Doyle の The Adventure of the Red-Headed League という短編推理小説の中にあるような (All the afternoon he sat in the stalls wrapped in the most perfect happiness, gently waving his long thin fingers in time to the music……) 「拍子を合せて」も in time with と一所に覚えておくとうれしい。

最後は代名詞だが、日本語では「あなたの」「彼の」「彼女の」とかいう所有代名詞をあまり使いつけないから、英語を話したり書いたりする場合、自然に代名詞がでてこないことが多い。

「乗車券をお持ちですか」という乗務員の質問を学生に英訳させると、“Do you have a ticket?” とやるものが多い。ちゃんと冠詞がついていて、少くとも文法的には正しい。まさか Yes, と、いって、野球の切符や映画の切符を差出して見せる皮肉屋もいまいが、理屈をいえば、1枚の切符なら、何の切符でもよいわけだ。こんな場合は、“Do you have your ticket(s)?” 即ち、この列車なり電車なりに必要な切符、言い換えれば、“the ticket(s) you are required to have” をお持ちですかというのが普通である。事実、この所有代名詞の用法が吾々日本人にとっては、むしろ正しいのである。松本享氏の American English のラジオ講座で、すでに、習った人もあると思うが、You know your Japanese geography well などの“your”が中々容易に出てこないものだ。Every Japanese student of English should know his Shakespeare (日本の学生として知っておくべき程度のシェークスピアに関する知識をいう)とか“What time do you have your breakfast?”のような表現はよく耳にする。勿論 American English に限ったことではない。

人称代名詞以外の代名詞の中で広く用いられるのが it, this, that 等だが、ここでは、this について、用例を少し挙げておく。人を紹介する時、This is Mr. Tanaka などといい、電話をかけるとき、This is Tanaka speaking などということはご存じの通りだ。又 This is Monday (=Today); He said this, that……; With this, he went out (=so saying); Long after this (其後永いことたって)などもよく使われる。又「この事は」などと、前に述べたことを this でうける用法もご承知のとおりだ、ただ、学生があまり使いつけないのは、目的格としての this

の転倒法だ、即ち、即ち、「この事を彼は短期間にやってのけた」 This he achieved in short order. のような表現はよく、見受けるものだが、He achieved this…… より力強い表現である。ちなみに、This is where he made a big slip. (大失策をやったのはこのところだ) を Here is where ということもある。

代名詞といえば、すぐ関係代名詞や疑問代名詞を思い出すが、本文では文法を説明するのが眼目ではないから、簡単に述べることにする。英文を読む場合は、関係代名詞がドイツ語やフランス語のように変化しないため正確な意味がとれにくいことが往々ある。しかし英作文の練習では無理をしてまで関係代名詞にこだわることはない。長い文章にしないで、短い sentence をならべて、意味をはっきりさせる方がよい、せいぜい one of which (whom), both of which (whom), many of which (whom), all of which (whom) とか前置詞と関係を示す by (for, from, on, to, with) which (whom) などを適当に使えるように心掛けたらよいと思う。Miss X, than whom few are more attractive などといわなくても Few are more attractive than she is. とか than her とかといえよ。又 a house in which to live や no chair on which to sit, the literature to which to refer (参考にする文献) などと固い表現を用いず単に a house to live in, no chair to sit on, the literature to refer to と書いて少しも差支えない筈だ。又 the dictionary I bought last week や I did all I could to help him のように目的格の場合の which 又は that の省略も、会話だけでなく書くときにも通用する。要は、会話で習った表現を、どしどし英作文の時に使うことだ。

疑問代名詞の中で Who is it by? (誰がかいたの、作ったの) が会話では By whom was it painted (written)? 等より、むしろ普通に用いられるが、英語では Who(m) do you want to introduce to who(m)? だれ

をだれに紹介するつもり? Which is which? どれがどれ? He knows what's what (ものの道理をわきまえている) のような表現も少なくない。ついでながら every which way というアメリカの俗語があるが、in all directions の意味で、They fled (helter skelter) every which way. (くもの子を散らすように逃げた) のように用いられる。What are you talking about? What did you do that for? Where do you come from? Who(m) did you play mah-jong(g) with? 等の表現は、極めて普通の pattern である。

以上で、冠詞、前置詞、代名詞の用法のややこしさを一通り述べたが、これら 3つの品詞は、用例でも分るように、相関連して用いられて sentence を形成しているのだから、英文を読むとき用法について、メモでもって、練習することをお勧めする。